

刊夕五十月五

常磐毎日新聞

定価 一月五拾五圓 三月一拾五圓 半年二拾五圓 一年五拾圓
 電話 六二〇〇
 發行所 常磐毎日新聞社
 印刷所 常磐毎日新聞社

お慈悲の味はひ

眞繼 雲山

人間の一生は花の咲く日ばかりはない。自身は眞面目に、正直に信心專一に送つてゐるつもりでも、先き様は注文通りに卸してくれず、先づ病氣は生ま身に付き、先づ病氣は生ま身に付き、三陣には火事もあれば雷もあり、津浪、難船、暴風雨など何んでもござれて、油断もスキもない。

佛が慈悲のかたまりなら何んでもそのやうな不幸災難の仕打をなさるのか私は佛の存在を否定したいと質問して来た人もあつた。一應もつともな話である、佛様を助け船と見て先方に眺めるとき、何人もこゝまで来て頼杖をつくののである。

誰しも災難は眞ツ平であるが、いくら眞ツ平といふてお辭儀をしても來るときは矢つぱり來るので、笑つて受けるか、泣きながら受けるか、迷悟の境である。

『あきらめる』といふ言葉がある。俗に『おれはモウ因縁だとあきらめた』、『前事は駄目だとあきらめた』といふ場合の『あきらめ』は絶望の詠嘆であり、運命への降伏であつて、そこには何の生命も光明もない。

『あきらめる』といふのは

元、佛教から來た言葉であつて『諦』の字を書き、諦觀をつゞく字で『明らかに觀する』である。事物の實相を誤りなく明らかに觀照するならば、怒つたり苦しんだり必要はないが、凡人は黒闇にあつて實相を見ず、化相に囚はれるから難澁に陥るのである。

聲聞乘の登龍門たる四諦の觀法といふのは、苦集滅道の四つの理を諦觀すること、それが原始佛教の根本となつてゐる。一口にいへば四諦とは苦の原因が那邊にあるかを究め、結局それは集める故に苦ありと知つてその集るといふ原因を道を修することによつて除き、以て滅諦（涅槃寂靜）の境涯に到ることを教へたものである。

諦らめると、明らかるとはもと同一字義であるが近

福の總司令官ではなく生死榮落ともに宿因の道であり業の相續である。その理を明らかに觀するに、よつて、生死輪廻の繫縛から自らの心が解脱することが出来る。心が解脱すれば從つて肉身も解脱し得る。如何にしてその理を諦觀するぞといへば、智慧によるので佛教とはその智慧を得るの修業であり、正道である。

智慧を得ることを一名『悟る』といふので智慧の得られた時がお慈悲の頂けたときである。

悟りを開き、お慈悲を頂いてみれば、天災地變も有つて當り前といふことにならぬ。當り前なら叩かれても痛うはないかといふに、生きてゐるゆゑ痛いは痛いが、痛さの味はひが違ふ。いかに違ふぞといふに悟ら

お慈悲の總本家たる佛様が、火事や津浪の天災を下されるとなつては腹も立つが、泣きながらにせよ、笑ふにせよ、それは人間かざるの勝手な心もちであつて佛様に交渉はない。佛は禍

二 明日の献立 二
 【朝】煎豆—うづら豆
 【晝】フライ—したひらめ
 【晚】薄くす汁—ひらめ
 小芋 そら豆

ノート
 煙草のやにのついでときは生味噌を溶いた汁で洗ふとよい

お前は繼母に叩かれるやうなもの、お慈悲を頂いての後は實母に叩かれる味はひである。その痛棒なくんば人、いづくんぞ眞理に體達して永生の佛土に到ることを得んや。味はひの變化は、立場の轉換である。

小兒科 内科

特ニ乳幼兒ノ康健相談ニ應ズ。

平町 ねずみ坂
 渡邊 醫院
 電話一六一番

大和田醫院

平町南町
 電話一〇七

五月人形陳列會

◎非常時日本の心意氣 尙武人形
 ◎品と値で常に祝品界をリードするフクダヤの名作品を御覽下さい。

御座敷飾セット 六圓ヨリ百五十圓迄
 武者人形 一圓ヨリ三十圓迄
 金太郎人形 五十錢ヨリ十八圓迄
 五巾外のぼり 十圓ヨリ四十五圓迄
 大鯉のぼり 二圓ヨリ四十八圓迄

二丁目のフクダヤ

是非御利用を

營業時間午後九時迄
 平町四丁目河岸通り
 三井 質店
 電話六〇六番

木炭代用この上のない經濟の 徳用な 豆炭

壹袋正五貫目入金 八十錢也
 御注文次第御届ケ申シマス
 三丁目(電話六六三番)
 磐崎屋酒店
 一丁目(電話五九六番)
 菅本武雄商店
 白銀町(電話二九九番)
 水野氷店
 六丁目
 矢吹石炭商店
 平驛前(電話三七番)
 阿部石炭商店

◎特約店募集致シマス

魚食堂

電話六〇三番

「勤勞讚美」の歌

平第一校で普及徹底

平第一小學校にては勤勞を讚美實行せしむるべく全校児童に對し左の如き勤勞歌を教授し學校或は家庭に於て朝な夕なに歌はしめる事になつた

一、早くねて早く起れば
ちゑをまし
身はすこやかに
家ははんじやう

二、極樂はいづこの果と
思ひしに
家業せいだす
正直のかど

三、世の中は何のへちま
と思へども
ぶらりとばかり
しても居られず

平第二校で
夏服を制定

平第二小學校にては全校児童に對し常識涵養の爲め日本製の夏服を制定し、児童に對する夏の標準服を制定見本を作製したが白地のセーラー型に襟は青くネクタイは赤にして見るからに涼しそうな服で値段は一圓以上一圓四五錢位であると

小野田清潔法

石城郡磐崎村小野田炭礦會社では去る十二日全山の坑夫長屋石油乳劑を散布して従業員の傳染病豫防に努めた

平第三校増築 近く請負入札

基金運用も認可さる

平町第三小學校増築案はさきに町會の議決を経縣へ認可申請中であつたがこのほど認可の指令があり同時に之が工費に充當すべき小學校基本財産二萬九百圓のうち一萬八千圓を運用の件も許可されたので近く入札を行ふ事になつた

有効六百九十五、無効一、棄權四十で當選者左の如くである

六二 永山 喜助

五九 志賀重右衛門

同 遠藤伊之助

同 遠藤惣三郎

五八 鈴木 一造

五七 鈴木房次郎

五二 鈴木文十郎

五一 馬目仙十郎

四七 阿部源兵衛

四五 遺藤 敏雄

四三 鈴木倉之助

豊間村議戦

さのう當選決定
既報石城郡豊間村の議戦は選挙昨日執行開票の結果

四二 四家 秀雄
次點四一政井 佐吉
二一遠藤 徳次

常 識 日本 的 姿

平第二で揭示教育
平第二小學校にては全校児童に對し常識涵養の爲め日本製の夏服を制定し、児童に對する夏の標準服を制定見本を作製したが白地のセーラー型に襟は青くネクタイは赤にして見るからに涼しそうな服で値段は一圓以上一圓四五錢位であると

△人の數
明治五年 三千三百萬人
本年 九千二百萬人

△鐵道の長さ
明治五年 二十九軒
本年 一萬五千軒

△小學校の數
明治五年 一萬二十校
本年 二萬六十校

△小學生の數
明治五年 十四萬人
本年 十四萬人

△國の大きさ
明治五年 三十八萬八千八百七十七方軒
本年 六十七萬四千八百七十七方軒

高工研究會

世界經濟講演
平商業學校第六回高工研究會は来る十七日午後七時より二丁目信用組合樓上に於て開き服部、武川、宮澤、大澤、木村各教諭の「世界經濟會議に就いて」と題する講演會を催すと

錦農會で肥

石城郡
錦村農會では毎年同村産業組合より肥料の共同購入をなして來たが本年夏作肥料も硫酸

關西の旅から

【奈良】都會風に馴れて來た。我等一行は早朝なつかしの鳥羽を去つた。伊勢路を汽車に任せて奈良に來れば、果して市中は旅の人々

平町人事

△結婚 烟
△揚土臺一九 上坂太刀作氏(二九)石城郡錦村字大島三二 蓬來正子(二二)

△回死 亡
△鎌田町五二 小林春子(二二)

△南町五〇 木部キミ(二二)

△長橋町三四 關内トク(八五)

澄谷春雄記

【大阪—京都間】我等磐中修學旅行隊が花の道頓堀を後に大阪城に向つたのは七時間近かつた。電車は忽にしてどつしりとこの繁華な大阪に腰を卸してゐる大阪城についた。豊臣時代の古建築頃よりの眺望すべ

外七種二千五百六十五俵金額三千四百七圓卅八錢の共同購入をなし本月十七日から四日間競争入札を行ふと

裁判所一行

平裁判所
炭礦を視察
所檢事局及び書記課員一同は來る二十日磐城、入山各炭山の狀況視察をなすと

鐵道の度量

東京鐵道局
は過般管内各驛の度量衡器検査を執行した結果平綴勿來の各驛で各一點宛の不合格品を發見したので早速修理を命じた

平町人事

△結婚 烟
△揚土臺一九 上坂太刀作氏(二九)石城郡錦村字大島三二 蓬來正子(二二)

澄谷春雄記

【大阪—京都間】我等磐中修學旅行隊が花の道頓堀を後に大阪城に向つたのは七時間近かつた。電車は忽にしてどつしりとこの繁華な大阪に腰を卸してゐる大阪城についた。豊臣時代の古建築頃よりの眺望すべ

關西の旅から

【奈良】都會風に馴れて來た。我等一行は早朝なつかしの鳥羽を去つた。伊勢路を汽車に任せて奈良に來れば、果して市中は旅の人々

平町人事

△結婚 烟
△揚土臺一九 上坂太刀作氏(二九)石城郡錦村字大島三二 蓬來正子(二二)

澄谷春雄記

【大阪—京都間】我等磐中修學旅行隊が花の道頓堀を後に大阪城に向つたのは七時間近かつた。電車は忽にしてどつしりとこの繁華な大阪に腰を卸してゐる大阪城についた。豊臣時代の古建築頃よりの眺望すべ

關西の旅から

【奈良】都會風に馴れて來た。我等一行は早朝なつかしの鳥羽を去つた。伊勢路を汽車に任せて奈良に來れば、果して市中は旅の人々

で一杯だつた。先づ案内人に導かれ奈良の玄關たる猿澤の池を見れば、遙るか向ふに興福寺五重の塔を望み優美其の極に達してゐる。春日神社は老杉空を覆ひ幽然として壯嚴たる事云はんかたなしである。三笠山に歩を取れば芝生、グリーン色に彩どられ、愛らしい神鹿の遊ぶ風景は尙印象に残つてゐる。黄昏時、二月堂三月堂、東大寺を見て今更大佛の世界無比の佛像に驚かされた。奈良は餘りも有名すぎる往古の都にして其の遺跡數ふるに違ない。今尙奈良朝時代を偲ぶ詩的境地である。

澄谷春雄記

【大阪—京都間】我等磐中修學旅行隊が花の道頓堀を後に大阪城に向つたのは七時間近かつた。電車は忽にしてどつしりとこの繁華な大阪に腰を卸してゐる大阪城についた。豊臣時代の古建築頃よりの眺望すべ

關西の旅から

【奈良】都會風に馴れて來た。我等一行は早朝なつかしの鳥羽を去つた。伊勢路を汽車に任せて奈良に來れば、果して市中は旅の人々

平町人事

△結婚 烟
△揚土臺一九 上坂太刀作氏(二九)石城郡錦村字大島三二 蓬來正子(二二)

澄谷春雄記

【大阪—京都間】我等磐中修學旅行隊が花の道頓堀を後に大阪城に向つたのは七時間近かつた。電車は忽にしてどつしりとこの繁華な大阪に腰を卸してゐる大阪城についた。豊臣時代の古建築頃よりの眺望すべ

關西の旅から

【奈良】都會風に馴れて來た。我等一行は早朝なつかしの鳥羽を去つた。伊勢路を汽車に任せて奈良に來れば、果して市中は旅の人々

平町人事

△結婚 烟
△揚土臺一九 上坂太刀作氏(二九)石城郡錦村字大島三二 蓬來正子(二二)

澄谷春雄記

【大阪—京都間】我等磐中修學旅行隊が花の道頓堀を後に大阪城に向つたのは七時間近かつた。電車は忽にしてどつしりとこの繁華な大阪に腰を卸してゐる大阪城についた。豊臣時代の古建築頃よりの眺望すべ

關西の旅から

【奈良】都會風に馴れて來た。我等一行は早朝なつかしの鳥羽を去つた。伊勢路を汽車に任せて奈良に來れば、果して市中は旅の人々

れば 明治天皇の御功及び御尊徳が眼の前に髣髴しては、途中の暑さも忘れた。後蟬の聲も涼しく聞えた。後直に乃木神社を参拜し得たことは誠に由あることと思つた。都合により豫定をかいて京都に疲れ果した體を運んだ。京都の名所はすべて順々に見學して廻つた。三十三間堂、圓山公園、清水寺、實に堂々たる古建築物です。緑の山清い流遙か彼方の東山實に繪の如し。大阪、東京と異つた趣がどこにも溢れてゐた。最後に平安神宮を見學して我等の美登里館についたのが午後五時。何につき京は我等の憧憬の都だつた。名所舊跡、平安朝時代の美術工藝の名残！ あゝさうだ。我等一行は今旅館にくつろいでゐるのだ。

澄谷春雄記

【大阪—京都間】我等磐中修學旅行隊が花の道頓堀を後に大阪城に向つたのは七時間近かつた。電車は忽にしてどつしりとこの繁華な大阪に腰を卸してゐる大阪城についた。豊臣時代の古建築頃よりの眺望すべ

關西の旅から

【奈良】都會風に馴れて來た。我等一行は早朝なつかしの鳥羽を去つた。伊勢路を汽車に任せて奈良に來れば、果して市中は旅の人々

平町人事

△結婚 烟
△揚土臺一九 上坂太刀作氏(二九)石城郡錦村字大島三二 蓬來正子(二二)

澄谷春雄記

【大阪—京都間】我等磐中修學旅行隊が花の道頓堀を後に大阪城に向つたのは七時間近かつた。電車は忽にしてどつしりとこの繁華な大阪に腰を卸してゐる大阪城についた。豊臣時代の古建築頃よりの眺望すべ

關西の旅から

【奈良】都會風に馴れて來た。我等一行は早朝なつかしの鳥羽を去つた。伊勢路を汽車に任せて奈良に來れば、果して市中は旅の人々

平町人事

△結婚 烟
△揚土臺一九 上坂太刀作氏(二九)石城郡錦村字大島三二 蓬來正子(二二)

澄谷春雄記

【大阪—京都間】我等磐中修學旅行隊が花の道頓堀を後に大阪城に向つたのは七時間近かつた。電車は忽にしてどつしりとこの繁華な大阪に腰を卸してゐる大阪城についた。豊臣時代の古建築頃よりの眺望すべ

關西の旅から

【奈良】都會風に馴れて來た。我等一行は早朝なつかしの鳥羽を去つた。伊勢路を汽車に任せて奈良に來れば、果して市中は旅の人々

父清七儀豫て病氣中の處藥石効無く十四日午前六時四十分死去致し候に付此段生前辱知の諸彦に謹告候也

澄谷春雄記

【大阪—京都間】我等磐中修學旅行隊が花の道頓堀を後に大阪城に向つたのは七時間近かつた。電車は忽にしてどつしりとこの繁華な大阪に腰を卸してゐる大阪城についた。豊臣時代の古建築頃よりの眺望すべ

關西の旅から

【奈良】都會風に馴れて來た。我等一行は早朝なつかしの鳥羽を去つた。伊勢路を汽車に任せて奈良に來れば、果して市中は旅の人々

平町人事

△結婚 烟
△揚土臺一九 上坂太刀作氏(二九)石城郡錦村字大島三二 蓬來正子(二二)

澄谷春雄記

【大阪—京都間】我等磐中修學旅行隊が花の道頓堀を後に大阪城に向つたのは七時間近かつた。電車は忽にしてどつしりとこの繁華な大阪に腰を卸してゐる大阪城についた。豊臣時代の古建築頃よりの眺望すべ

關西の旅から

【奈良】都會風に馴れて來た。我等一行は早朝なつかしの鳥羽を去つた。伊勢路を汽車に任せて奈良に來れば、果して市中は旅の人々

平町人事

△結婚 烟
△揚土臺一九 上坂太刀作氏(二九)石城郡錦村字大島三二 蓬來正子(二二)

澄谷春雄記

【大阪—京都間】我等磐中修學旅行隊が花の道頓堀を後に大阪城に向つたのは七時間近かつた。電車は忽にしてどつしりとこの繁華な大阪に腰を卸してゐる大阪城についた。豊臣時代の古建築頃よりの眺望すべ

關西の旅から

【奈良】都會風に馴れて來た。我等一行は早朝なつかしの鳥羽を去つた。伊勢路を汽車に任せて奈良に來れば、果して市中は旅の人々

友人總代 石川 徳三 壽平

親戚總代 齊藤 昌萬

同 柏木 哲諒

男 木 久保 得平

比 佐 昌平

鈴木 辰三 壽平

石川 徳三 壽平

戦機やうやく満ち

血眼の各候補

出馬確實既に三十五名

平町議戦展望

あますところ愈々後十五日に迫つた平町議戦は十四日迄に正式立候補届が十四名更に立候補確実となつて今日に届出られる人々は二十三名を算し定員を七名超過して戦ひは果然一大混戦を演ずる事となつた、現議員の肩書を有して立候補の名乗りをあげた人々は何れも従来の地盤を堅守してゐるに對し新顔も又それ／＼縁故關係や特殊關係を頼つて懸命な地盤開拓を試みつゝあり形勢は何れも一進一退殆んどシーソー的戦績を納めてゐるので全面的に見て戦場は混沌とし目下の現勢では何人が優勢にあるか全く豫測されずにある。尙十日迄に立候補届をなした馬目雅治氏の外十三名以外に立候補確定してゐるのは左の人々である

- 鎌田町 鈴木光吉 政
- 猪狩觀徳 中
- 佐藤岩次郎 民
- 多田井笑次郎 政
- 關内正一 政
- 吉村安次郎 民
- 永山富廣 民
- 馬目雅治 民

- 吉田寅之輔 民
- 花澤久一郎 政
- 川崎文治 中
- 會川延太郎 中
- 坂本隆藏 中
- 井上茂作 中
- 馬目武之助 中
- 松崎長太郎 中
- 小野伊佐治 中
- 根本品藏 中
- 佐々木龍若 中
- 新井滋藏 中
- 緑川喜三郎 中
- 堀喜一 中
- 田町 野崎滿藏 政
- 森本盛一 政
- 白銀町 高橋龜松 中
- 櫻井清 中
- 南町 齊藤寅吉 中
- 小松茂 中
- 吉田五平 中
- 萩原義雄 中
- 石山治三郎 中
- 吉田金作 中
- 荒川淺次郎 中
- 佐藤幸太郎 中
- 大和田與平 中

情操教育に

花壇を栽培

平第二校の行事

し先崎訓導が主任となり花壇を設け、ゼラニウム、朝顔、ダリア等を栽培せしめると共に荒訓導が主任となりカナリヤ、セキレイシニコ、十姉妹、金魚等を飼育せしめて居るが目下は阜月ゼラニウムが満開にてそれに鳥類が可愛い聲を張り上げて囀り子供達を非常に喜ばしてゐる

卓球リーグ戦

税務署軍優勢

既報石城卓球協會主催の卓球リーグ戦は昨日午前八時より常磐銀行樓上に於いて開催各チームが五回宛出場の上優勝率を決定する豫定であつたが各試合共接戦を演じて競技半にして日没となり来月十二日午前八時より同所にて再會決勝を



明日のラジオ
十六日
今夜は北西の風晴
曇相半し明日は南
西の風一時曇

今晚の部

- 後六、〇〇 子供の時間
- 童話 安倍秀雄
- 後八、三〇 俚諺 近野春洋外
- 後八、〇〇 常磐津 常磐津三藏社中
- 後九、一〇 ギター獨奏
- 後九、三〇 時報 ニュー

明日の部

- 前六、三〇 基礎ドイツ語講座(十五)橋本忠夫
- 前九、一〇 料理献立「オムレツライス」東北女子職業學校発表
- 前一〇、三〇 家庭講座「懐石料理法」栗山善

罪金滞納者に

最後の手段

平検事局整理を急ぐ

平検事局では過般來罰金及び科料未納者に對し再三督促を發し之が整理をなし居るが不景氣の爲め分納者が多く完納に至らないので整理上止むを得ず本日愈々最後の逮捕狀を發し換刑する事になつたが未納者は二百六十名にて金額は四千二百餘圓である

古河炭坑の

黒鼠

平署に捕はる

石城郡好間村大字上好間字馬場内居住古河炭坑夫引田玉夫(三)は大正十四年七月同礦倉庫より價格三百圓の旋盤機を窃取し分解の上

四郎

- 後〇、〇五 管絃樂 寶塚オーケストラ
- 後二、〇〇 家庭大學講座「露西亞の近狀」參謀本部員陸軍歩兵少佐藤塚止才夫
- 後二、二〇 野球試合實況 東京大學野球聯盟リーグ戦(明治神宮外苑球場より中繼)
- 後四、〇〇 大角力夏場所實況(五日目)國技館より中繼
- 後六、〇〇 子供の時間

新妻 倉町長

万場一致再選

既報石城郡四倉町の町長改選々舉は昨日執行されたが現町長新妻盛氏の信望厚く萬場一致で再選に決定した

自動車衝突

オートバイと

平町仲町材木商益尾順一郎(四)は昨日午後一時頃オートバイを連轉して三丁目地内を進行中同所を横斷せんとした南町芹澤正忠(三)の運轉せる自動車の横腹に衝突せしめて全治十日間の打撲傷を負つた

分別男縊死

神經衰弱の果て

石城郡湯本町水野谷字六九居住農小野久治(七)は今日十五日前六時頃自宅二階

裁判所だより

△双葉郡久之濱町宇北町五十六番地漁業吉田賢次郎(三)は昨年十二月十三日宮城縣壯鹿郡鮎川村十二連の沖合なる禁止區域内に於て底曳網を使用し小鰈六尾を採捕し機船底曳網漁業取締規則違反として罪金二十圓△石城郡小名濱町宇古港二十一番地水野政次郎方雇人菅野萬吉(三)は去る三月三十一日主人方肥料製造工場に於て強風にして附近に草菅屋根の家屋多數在るに拘らず不注意にも火の粉飛散し易き鉋屑を釜に入れてたきたる爲め煙筒より飛火して同町小野定七方住家二坪位を焼燼し公共の危険を生せしめ失火罰として罪金二十圓に本日各平區裁判所に於て略式命令を以て處分された

